

---

# 恋詠花

館野寧依

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

恋詠花

### 【Nコード】

N0649BA

### 【作者名】

館野寧依

### 【あらすじ】

アイシャは大国トウルティエールの王妹で可憐な姫君。だが兄王にただならぬ憎しみを向けられて、王宮で非常に肩身の狭い思いをしていた。

そんな折、兄王から小国ハーメイの王に嫁げと命じられたアイシャはおとなしくそれに従う。しかし、そんな彼女を待っていたのは、手つかずのお飾りの王妃という屈辱的な仕打ちだった。それは彼女の出自にも関係していて……？

これは後の世で吟遊詩人に詠われる二人の王と一人の姫君の恋

物語。

## 01 下賤の姫

オルデリード大陸第二の大国、トウルティエール。

この国はまだ二十歳そこそこの若い王が統治している。  
名をルドガーと言い、典型的なトウルティエール王族の特徴である白金の髪と青灰色の瞳をしていた。

そして、その彼にはこの国の王族ではあり得ない灰桜色の真っ直ぐな長い髪に胡桃色の瞳を持つ妹姫がいた。

「アイシヤ様、陛下がお呼びでございます」

やや年かさの侍女であるライサが知らせてきたのを受けて、アイシヤは少々慌てる。

兄王とは折り合いが悪く、普段アイシヤは彼にないものとして扱われていた。

それが、今回の唐突な呼び出しだ。

ルドガーには意図があるのだろうか、アイシヤはそれがなにかも想像がつかない。

「まあ、陛下がお呼びだなんてなにかしら……？ 良いことであればいいのだけれど」

それでも久しぶりの兄王との対面にアイシヤは心を浮き立たせていた。

ルドガーとの折り合いは悪いが、アイシヤは決して兄王を嫌っているわけではなかった。

「アイシヤ様、陛下の御前に出られるのですから、その前に髪を少し結いましょう」

「あ、そうね。衣装はこれでいいかしら？」

ライサの言葉にアイシャは素直に頷くと、自らを見下ろした。

今日のアイシャは象牙色のやや控えめな意匠のものを身につけていたが、これは髪型でそれなりに華やかになるだろう。

美しい灰桜色のアイシャの髪は結わずにいても充分見事ではあったのだが、ただでさえアイシャに厳しいルドガーの前に出るのにそれでは体裁が悪いだろうとライサは考えたのだ。

「はい、よろしいと思いますよ。それでは、姫様こちらへ」

ライサに導かれて、アイシャは衣装部屋の鏡台の前に座った。

ライサに髪を丁寧にブラシでかけられると、アイシャの髪はより美しい艶やかさを醸し出した。

「本当に素敵な御髪ですわ、アイシャ様」

「……ありがとう」

大事にしている髪をライサに褒められたのと、久しぶりに兄王に会える嬉しさで、アイシャは頬を綻ばした。

ライサはアイシャの両方の横の髪を結うと、そこを白い咲きかけの薔薇と白い小花で飾る。

そうすると、アイシャの可憐さがより引き立ち、まるで妖精のように見えた。

「さあ、出来ましたわ。それでは陛下の元へご案内します」

「ええ」

大きな姿見で自分の姿を確認していたアイシャがそれに微笑んで答えた。

これなら、きっとあの方もみすばらしいとはおっしゃらないわ。

ルドガーにいつも厳しい言葉ばかりかけられているアイシャもこの支度の出来映えに満足して、ライサの先導でルドガーが待つ謁見の間へ向かった。

その謁見の間の玉座には、ルドガーが肘をつけてなにかを考え込むようにして座っていた。

「お呼びでございますか、陛下」

アイシャは兄王の前で姫君らしく正式な礼をする。

可憐なその様子をつまらなそうに見やりながら、ルドガーは早々に話を切りだした。

「……この度、おまえの婚礼の話がまとまった」

控えめにたたずんでいたアイシャはその言葉に衝撃を受けたようにルドガーの顔を見返した。

「わ、わたくしの婚礼でございますか……？」

王妹たるもの、いつかは来る話だとアイシャも思っていた。

ただ、それがこんな急に訪れるものだとは思ってもいなかった。

「おまえの嫁ぎ先はハーメイだ。下賤の出のおまえが小国とはいえ、国王の正妃となれるのだ。ありがたく思うのだな、アイシャ」

ルドガーがアイシャを下賤の出と言ったのには訳があった。

彼女は先王の第二王妃の娘だが、先王とは血の繋がりのない姫だったのだ。

つまり、ルドガーとアイシャは兄と妹という関係ではあるが、まったくの赤の他人だった。

そして、彼とアイシャが折り合いが悪いのもこれに起因していた。

「……ハーメイ……」

わたしがハーメイの王妃に。

確かにわたしの出自から考えたら、これほどの良い話はないのか

もしないわ。

それでも突然訪れた自分の婚姻話に、アイシャはうろたえてしま  
う。

下賤の者と蔑まれても、まだアイシャはこのトウルティエル王  
宮に身を置いていたかったのだ。

「これで賤しいおまえと縁が切れると思うと清々するな。……ただ、  
おまえはこの大国トウルティエールの王妹として嫁ぐのだ。このわ  
たしに恥をかかせる真似だけはするな」

「は、はい」

ルドガーの辛辣な言葉にアイシャの身が震える。

アイシャは泣くまいと思っただが、その瞳には既に涙が浮かんでい  
た。

優しい言葉など望めるはずもなかった。

しかし、アイシャはどうしても彼にそれを期待してしまうのをや  
められなかった。

……だが、空しいその時はもう終わりを告げるのだ。

自分がこの王宮から出てしまえば、彼とはもう二度と会うことは  
ないのだから。

「……泣いて同情を誘うつもりか。おまえは本当に浅ましい女だな」  
ルドガーが心底嫌そうに言う。

すると、アイシャの頬を涙が伝っていった。

陛下は本当に優しくないとアイシャは思う。

けれど、それは仕方のないことなのだ。

わたし達が彼から奪ってしまったものはとてつもなく大きい。

「わたしの前で泣くな。鬱陶しい」

「は……い、申し訳、ございませ……」

ルドガーの叱責に涙を止められなくなったアイシャをかばうようにしてライサがその前に立った。

「御前失礼いたします。陛下、アイシャ様はもう下がられてよろしいでしょうか？ 姫様はお話ができる状態ではございませんし」

「ラ、イサ……」

アイシャがただ一人信頼のおける侍女の名前を呼ぶと、ルドガーは忌々しそくに顔をしかめた。

「いや、いい。もう話は済んだ。わたしがここを出ていく。ライサ、その鬱陶しい女をどうにかしろ」

「……かしこまりました」

ライサが頭を下げると、ルドガーは玉座から立ち上がりその場を去った。

ライサから手巾ハンカチを渡され、アイシャは涙を拭くと大きく息をついた。

「……ライサ、ごめんなさい。こんなふうに取り乱してしまって」

「アイシャ様は気になさらなくてよろしいですよ。……それにしても、急なお話でしたわね」

「ええ……」

安心させるかのように優しく語りかけるライサに幾分落ち着いたアイシャは頷いた。

確かに急な話だった。

王族と名乗ることすらおこがましいと自分でも思っていたアイシャは、いずれはこの国の貴族にでも降嫁することになると思っていた。しかし、それがまさか隣国の王の花嫁とは。

「でも、これもよい機会かもしれませんわ。アイシャ様はこれまでのことはお忘れになって、ハーメイの国王様とお幸せになられるとよろしいのです」

「……ええ」

ライサの慰める言葉に、しかしアイシャはどこか哀しそうに頷いた。

多分あの方と会うのはこれが最後だろう。

……結局、この想いは告げることすら出来なかった。

「アイシャ様……」

ライサが衣装の胸元を掴みながら俯いたアイシャを気遣わしげにのぞき込む。

アイシャはついぞ叶うことのなかった恋の痛みに、いつの間にか涙を流していた。

## 02 昔語り(1)

「……アイシャはどうしている」

再びライサだけを今度は執務室に呼び出したルドガーは、気がかりそうに眉を寄せて尋ねた。

先程アイシャが自分のきつい言葉で涙を流していたことをルドガーは内心では気に病んでいた。

「今は落ち着いておられます。……後でご心配なさるくらいなら、最初からあのようなことをアイシャ様に申し上げなければいいのですわ。……アイシャ様には突然他国へ嫁ぐ戸惑いもあるでしょうに、その上であのおっしゃりようはあまりにもお可哀想です」

「う……む」

ライサの小言にますますルドガーの秀麗な顔が歪む。

出来れば、こんな時ぐらいいは優しい言葉をかけてやるべきだったかもしれない。

しかし、長年の習性というのは簡単には抜けないものだ。

それに、今回仕方なくアイシャを他の男に渡すことに決めたのもそれに拍車をかけていた。

ルドガーは本当はアイシャのことを愛していた。それもかなりの長い間。

出来ることならば、アイシャを誰にも渡さずに自分のものにしてしまいたかった。

だがそれは、アイシャ母娘がこの城に現れた時点で、許されないことだと運命づけられていたのだ。

ルドガーは思い返す。

忘れようにも忘れられない、その日のことを。

事の始まりは先王ディラックが城に招いた美貌の踊り子クリステイナに恋をしたことによる。

その当時、ルドガーは十歳だった。

ディラックがクリステイナを第二王妃に据えることに決めると、当然正妃を含む周囲は反対した。

おまけにクリステイナには死別した夫との間に娘がいたのだ。それがアイシャだった。

「卑しい踊り子などを妃に据えるなど、聞いたこともございません！　どうか、陛下お考え直してくださいませ。聞けばあの女には連れ子までいるというではありませんか。陛下は、トウルティエール王家に卑しい血を混ぜるおつもりなのですか!？」

今までディラックは一夫多妻制にも関わらず、今まで他に妃を娶らずにいた。それは確かに彼がオーレリアを愛しているという証でもあった。

そしてその寵愛を一身に受けていたはずの正妃オーレリアは国王ディラックに必死に訴えた。

「……黙りなさい。そなたのそんな言葉は聞きたくない。それに、もうこれは決定したことです」

静かに言うディラックに、オーレリアは愕然とその場に立ち尽くす。

「……第一王妃を部屋に連れて行きなさい。なるべく気を高ぶらせないように」

正妃ではなく、わざとかのような第一王妃という言葉はオーレリアの逆鱗に触れた。

「すべて陛下のせいではありませんか！　わたくしは認めません！　絶対に許しませんわ!」

近衛や侍女に無理引きずられるように連れられながら、オーレリアは絶叫する。

その様子を苦々しい様子で、見つめていたディラックは侍女長に

命じた。

「王と妃の間の扉を全て施錠するように」

それを聞いた者達は思わず息を飲んだ。

それはすなわち、王が正妃を拒絶したも同然ということだ。

「陛下……、それはあまりにもオーレリア様がお気の毒ですわ」

今まで共に国のために尽くしてきたというのに国王のこの仕打ちはあまりに冷酷すぎる。

「オーレリアには正妃という身分がある。それだけで充分でしょう。

……それよりも正妃がクリステイナ達に手を出さぬようによく見張っておくように。あの様子ではかなり不安だ」

「父王っ、母上に対してその仕打ちはあまりにも酷すぎます」

それまで黙って事態を見守っていたルドガーが苦言を呈した。

しかし、それを国王は鼻で笑った。

「まだ成人になるのに年数があるそなたがなにを生意気なことを言いますか。そんなことは政務のことを少しは理解できるようになってから言いなさい」

「……正妃を疎かにして、どこの馬の骨ともしれない女性を寵愛することが政務ですか」

十歳の子供とも思えない大人びた口調でルドガーが正論を言う。

一瞬ディラックは絶句すると、ややして気を取り直したようにルドガーに命令した。

「黙りなさい。いずれおまえに約束された王太子の身分を破棄してもいいのだぞ。……そうすれば、おまえの母は正妃である必要もなくなる」

国王ディラックは、穏やかな口調に隠した牙を血を分けたはずの息子に剥く。

「……あなたは！」

拳を握って王に飛びかかろうとするルドガーを近衛兵達が必死に止めた。

ここでルドガーが王に危害を加えては、この国は本当に後継者がいなくなってしまう。

ディラックは羽交い締めにされるルドガーを冷たく一瞥すると、クリステイナ母娘に用意された部屋へと足を向けた。

それをただ見ているしかできない己の無力さに憤りながら、ルドガーは涙を堪えていた。

「あつ、おうさま！」

「アイシャ」

アイシャがディラックの姿を認めると美しい灰桜色の髪をなびかせて駆け寄っていった。

「そういえば、アイシャ。歳はいくつになりますか」

「七歳です」

ディラックに抱き上げられながら、幼いアイシャは愛らしく答える。

その様子にディラックは相好を崩した。

「そうですね」

成さぬ娘ではあるが、アイシャはとても可愛らしく、いつまでも愛でたくなる。

クリステイナとはあまり似てはいないが、それでも成長すればさぞ美しい姫になることだろう。

「そなたにはいつか、似合いの相手を用意しましょう。……そして、素晴らしい地位も」

その言葉が理解できないアイシャはきょとんとしてディラックを見ている。

「……陛下。わたし達はここには留まらない方が良いのでは。第二王妃の地位など、わたしには過ぎますわ」

楽団の仲間と引き離され、無理矢理に王宮に押し込まれたクリス

ティナがあまりの大事に顔色をなくしている。

ディラックはアイシャを床におろすと、不安げなクリステイナを抱き寄せた。

「わたしはそなたを離しませんよ、クリステイナ。正妃が既にいなければそなたをその座に据えたいところです。いえ、第一王妃をどうにかすればあなたを正妃に出来ますね」

それは正妃をいつ排除しても構わないのだという非情な言葉だった。

「！ そんな、それでは正妃様がお気の毒すぎますわ。お願いですから、二度とそんなことはおっしゃらないでくださいませ」

クリステイナが首を横に振ってディラックに懇願する。

「……あなたがわたしを愛すると誓うのならば、二度と口にはしませんよ、クリステイナ。愛しい人」

二人のただならぬ様子を幼いアイシャが目にして固まっている。

その体をアイシャの侍女のライサが慌てて抱き上げて、別室に連れていった。

「……誓います。ですから、かつての仲間にも、正妃様にも酷いことはなさないでください」

「分かってくださればよいのです。クリステイナ、愛しています」

これ以上ない程の優しい笑みを浮かべながら、ディラックがクリステイナに口づける。

いわば、クリステイナは仲間達の命と引き替えに無理矢理その地位に就かされた囚われの王妃だった。

そしてクリステイナは己の運命を恨みながら、この王が誓いを守ってくれるのを祈ることしかできなかった。

### 03 昔語り(2)

それから国王に冷遇された正妃によるクリステイナへの嫌がらせが始まった。

「まあ、酷いですわ!」

クリステイナの衣装部屋のドレスが全て泥で汚されているのを発見して、侍女達が眉を顰めた。

名こそ出さないが、侍女達は正妃のことを口々に非難している。

「他の部屋に衣装があつたでしょう。そこから出してきてちょうだい。……このことは、陛下にはくれぐれも内密にね」

「は、はい……」

クリステイナが侍女に念を押したが、その者以外も納得できないような顔をしていた。

今や誰の目にも王の寵愛は第二王妃であるクリステイナにあるのだ。

それ故に、黙って正妃の横暴を許すのはクリステイナに心酔しつつある侍女達には看過できなかったのである。

「クリステイナがオーレリアの手の者に衣装を汚されたと?」

ディラックは執務の手を止めて、その侍女から報告を受けていた。彼はそれを聞きながら嫌悪をあからさまに顔に出していた。

「はい、十中八九間違いないと思われます。正妃様付きの使用人が出入りするのを目撃した者もおります」

「……そうですか。では、正妃の衣装を全てスタスタに引き裂くように」

それを聞いた侍女は息をのんで、さすがにためらう様子を見せた。

「で、ですが……」

「王であるわたしが許可します。必ず実行に移すように」

命令を受けた侍女は顔を青くしながら頷くしかなかった。これを拒否した場合、王からどんな処罰が待っているか分からない。

報告に来た侍女が退室すると、ディラックは手元の真新しい紙をぐしゃりと片手で握り潰した。

「……オーレリア、クリステイナに手を出すとは小賢しい」

だが、このことで少しあの妃もおとなしくなるだろうとディラックは事態をまだ軽く見ていた。

翌日、国王の命を受けた侍女の者によって、それは実行された。

「正妃様、大変ですわ！ お衣装が全てズタズタにされております」「なんですって！ ……あの女、己の血の卑しさも顧みもせずになんと恐ろしい真似を」

見るも無惨な姿になった衣装にオーレリアは顔色を無くしながらもここにはいない憎い恋敵に悪態をつく。

それまで卑しいクリステイナにしてやったりと嘲笑していた正妃オーレリア側にとって、その反撃は激しい衝撃だった。

まさか、クリステイナ側が仕返しをしてくるとは思っていなかったのである。

……実際は、クリステイナは関わっておらず、王命によるものであったが、まだ彼女達はそこまで把握してはいなかった。

衝撃からどうにか立ち直ったオーレリア付きの侍女達は、賓客用

の衣装部屋から正妃の衣装を調達して彼女に着付ける。

そして急遽衣装屋を呼びつけて、ドレスを何十着と新調させたのである。

それを聞きつけたディラックは正妃の浪費に思わず顔をしかめた。衣装ならば、要人用の予備の部屋にいくらでも準備してあるのだ。今回オーレリアがドレスを大量に新調し、それに合わせた飾りなども作ったため、国の財政圧迫までとはいかないが、妃にかかる費用の上限を明らかに超えてしまったのである。

「オーレリアに無駄な出費を控えるようにと伝えなさい」

……もっとも、この件についてはディラックの自業自得とも言えた。

クリステイナと同じように衣装を汚すだけにとどめたならば、今回の正妃の浪費には繋がらなかったかもしれないのだ。

そして、宰相を通して、オーレリアに伝えられた言葉に対しての彼女の返答はこうだった。

「卑しい女に衣装をズタズタにされたのです。それに、正妃の衣装がみすばらしいのはいけませんわ。ですから衣装を新調するのは当然のことです。ご不満があるのでしたら、あの女におっしゃってくださいませ」

正妃に衣装を汚されたクリステイナは、その洗濯が終わるまで予備のドレスで過ごしているというのに、それを思うとディラックは余計にオーレリアのことを厭わしく感じられた。

そして、正妃の嫌がらせはクリステイナにとどまらず、その娘のアイシヤにも向けられた。

「きゃああ」

アイシャは鏡台の上に芋虫の死骸を見つけて思わず叫びをあげた。芋虫はバラバラにされて、ところどころ潰れて鏡台の上に汚らしく張り付いている。

「誰かに片づけさせますわ」

アイシャ付きの侍女のライサが言うが、若い侍女達は気持ち悪がつて傍にすら近寄らない。

ライサは男性の使用人を呼び出すと、鏡台の上を片づけさせた。

悪趣味なことに、道具のあちこちに芋虫の死骸を擦りつけたらしい。肉片がブラシや道具類にこびりついている。

仕方なく、その道具類は処分することにライサは決めた。

それから、ライサはクリステイナとディラックに事の次第を伝えた。

「わたしだけならともかく、アイシャにまで……酷い」

正妃から王の寵愛を奪った形のクリステイナは自分が嫌がらせを受ける分には仕方ないと諦めていたが、それがアイシャにまで及んだことを知り、憤った。

「……とにかく、アイシャの道具を駄目にした者は探し出して、処罰しておきます。クリステイナ、それで許してください」

「え、ええ。なにとぞ、その者にはあまり酷い罰を与えないくださいませ。おそらく、逆らうことの出来ない立場の者でしょうから」

確かに実行したのはオーレリアの使用人だろうが、身分の低い彼らには正妃の命令に抗うことなど実質不可能だ。

「……分かりました。心に留めておきます」

出来ることなら拷問にでもかけたいところだが、クリステイナのたつての願いだ。

仕方なくディラックはその懇願を聞くことにした。

それにそのような末端のものを処罰したところで、オーレリアに

は痛くも痒くもないだろう。

そして、同じようにオーレリアの道具類を駄目にしても、衣装の時と同じように確実に高価な物へ新調されるだろう。

そこにも正妃オーレリアの計算を感じて、ディラックは齒噛みし、彼女への憎しみを募らせた。

そしてクリスティナに聞こえないように呟く。

「オーレリア、このままで済ますとは思わないことだ」

しかし、ディラックのその言葉とは裏腹に、正妃オーレリアのクリスティナ母娘への仕打ちは次第に酷いものへと加速していったのである。

## 04 昔語り(3)

それが起こったのはアイシャが八歳の時だった。

ふといたずら心を起こして、アイシャは侍女の目を盗んで庭園に一人でいた。

子供らしい行動ではあるが、微妙な立場にあるアイシャには非常に不用心な行動であった。

そのアイシャが庭園の池に手を浸しているのをたまたま正妃オーレリアが見つけたのが彼女の不運だったろう。

近くに人の気配はない。王の寵愛を一身に受けているクリステイナの子を害するには絶好の機会といえた。

しかも、成さぬ子のはずなのに、この少女をディラックは目に入れても痛くないほどに可愛がっているのだ。

王太子になる予定のルドガーでさえ、帝王学を学ばせること以外はろくに構いもしないというのに、この差はなんなのだ。

クリステイナも憎いが、全く王家の血を受けていないのに、ディラックに愛されるアイシャも憎らしい。

「あの卑しい子供を池に突き落としておしまいなさい」  
傍にいた侍女にオーレリアは命ずる。

「しかし、それではあの娘の命に関わってしまうのではないのでしょうか？ それは、さすがに陛下がお怒りになるのでは？」

まだ年若い侍女は、正妃の容赦ない命令に戸惑ったように彼女を諫めた。

しかし、それは逆にオーレリアの怒りを買ってしまった。

「一介の侍女の分際で正妃のわたくしの命に逆らうのですか？ ならなおまえの実家になんらかの処分を与えてもよいのですよ」

「そ、それだけのご勘弁ください。……かしこまりました。正妃様のご命令に従います」

この侍女の出身の男爵家はそれだけでなく、資金繰りが厳しい。

侍女は仕方なくオーレリアの命に従うしかなかった。

アイシャは池に泳いでいる魚に目を奪われている様子で、熱心に池の中を見ていた。

オーレリア付きの侍女は、アイシャに気づかれないようにそろそろと近づくと、その背を思い切り突き飛ばした。

「きゃああ!？」

いきなりのことにアイシャが悲鳴を上げて池に落ちた。

運動神経は良いアイシャだが、ドレスが水を吸って上手く泳げない。

「ふふふっ、よくやったわ! おまえには特別になにか報奨をあげましょう」

オーレリアに上機嫌に言われても、アイシャを突き飛ばした侍女は己の罪深さにその場でがくがくと震えるだけだった。

その時だった。

「なにをやっているのですか、母上! いくらなんでもこれはやりすぎです!」

その場にルドガーが現れ、池の中に自ら入って、溺れているアイシャを助け出した。

そして、アイシャの背をさすって水を吐き出させる。

「……大丈夫か?」

「あ……、大丈夫です」

てつきり敵対していると思っていたルドガーに助けられて、アイシャは内心驚いていた。

てつきりこのまま自分は死んでしまうと思っていたのに。

この方はわたしの命の恩人だ。

その時から、アイシャはルドガーに対する見方が変わった。

そして、彼に対して好意を持ち始めた。これがアイシャの初恋の

始まりだった。

対するルドガーは、アイシャの肌に張り付いたドレス姿に内心動揺していた。

アイシャはまだ八歳なので娘らしいふくよかさはまだない。

だが、透けて見える肌に妙な艶めかしさを感じてアイシャから目を離せなかった。

……たぶんこの娘は、数年後にはとても美しくなるだろう。

そんな予感を感じて、ルドガーは今まで関心のなかったアイシャのことが急に気になり始めてきた。

「ルドガー、なにを余計なことをしているのです。せつかく卑しい娘を葬り去る良い機会でしたのに」

かなり憤慨した様子でオーレリアが息子に抗議する。

「ですから、やりすぎだと言うのです。この母娘が憎いのは分かりますが、このことが父王に知られたらきつと激怒されますよ」

「陛下に知らなければよいのです。そうすれば、ただの事故として処理されるでしょう」

甘い考えのオーレリアにルドガーは頭を抱え込みたい気分になった。

「それは無理ですよ。この母娘にはそれなりの護衛が付いています。それもかなりの力を持つ魔術師が。このことが父王に知られるのも時間の問題ですよ」

ルドガーのその言葉に、自分のしでかしたことの重大さを思い知って、オーレリアは青ざめた。

……だが、命じたのは自分だが、実際に娘を池に突き落としたのは侍女だ。自分ではない。

オーレリアはそう思い直すと、自分の息子に告げた。

「それがどうしました。卑しい娘を池に突き落としたのはこの侍女です。わたくしに非はありませんわ」

「そんな、正妃様！」

オーレリアの命令を仕方なくきいた侍女が悲鳴のような声を上げる。

ルドガーはオーレリアのその返答を聞いて、これ以上母になにか言うのは無駄だと思い、池の傍に座り込んでいたアイシャの腕を取り立ち上がらせた。

「早く着替える。そのままでは風邪をひく」

「はい。ありがとうございます。ルドガー様」

ルドガーの優しい言葉にアイシャは再び驚きながらも、にっこりと笑った。

ルドガーはアイシャのその愛らしい笑みにどきりとする。

……どうしたというんだ、わたしは。こんな子供に気を取られるなどおかしいではないか。

ルドガーが内心動揺している内に、アイシャ付きの侍女のライサが慌てた様子で現れた。

「まあ、アイシャ様、そのお姿はどうなさったのですか!？」

全身ずぶぬれのアイシャを見て、ライサが驚いた声を上げる。

「お魚を見ていたら池に落ちちゃったの。ライサ、ごめんなさい」

そこでライサはオーレリアの存在を認め、アイシャの言ったことが嘘だと言うことに気づいた。

おそらく、オーレリアがアイシャになにかしたに違いないと、見る見るライサの顔が厳しくなっていく。

「なんですか。この卑しい娘の侍女は正妃に対する礼もなっていないのですか。その無礼な表情はなんです」

「失礼いたしました、正妃様。以後気をつけます。それでは、御前失礼いたしますわ」

オーレリアの嫌みもそれほど気にした様子もなく、ライサは笑顔で彼女に礼をする。

「さあ、アイシャ様、すぐに湯殿に参られて、着替えましょう。お風邪を召したら大変ですわ」

「ええ、ライサ」

アイシャは頷くと、正妃とルドガーに退出の挨拶をして、遅れてやってきた近衛の者に伴われてその場を去った。

しかしルドガーの中では、先程のアイシャの歳には似合わない艶めかしさや、愛らしい笑顔が幾度も繰り返されていた。

敵対する娘だというのにわたしはどうしたんだ。先程からあの娘のことが気になって仕方がない。

それが恋という感情だということにルドガーが気づくのは、だいぶ経ってからだった。

## 05 昔語り(4)

城の堀に両手足の爪の剥がされた侍女の死体が浮かんだ。

それは、アイシヤを池に突き落とした侍女だった。

そのことを居室で知ったオーレリアは、己の侍女のあまりの惨たらしい死に様に青ざめた。

さすがにこれは、クリステイナでは出来ないだろう。

……実行に移せるとすれば、それは国王ディラックでしかありえない。

己の侍女を恐ろしい拷問の末に城の堀に投げ捨てるなど常軌を逸している。

オーレリアはディラックの容赦なさに、しばらくその身を震わせていたが、やがてなにかを決意したように顔を上げた。

「陛下の元へ参ります」

そしてオーレリアは侍女数名を引き連れ、ディラックの執務室へと押しかけたのである。

しかし、実際に入室が許されたのはオーレリア一人だけだった。

オーレリアは侍女も付けられずかなり不満だったが、執務室にはディラックのみであったので、おそらく人払いをしたのだろうと納得した。

オーレリア付きの侍女を拷問の末に堀に捨てるなどという、残虐極まりないことをしたのだ。もし、人に聞かれたら温厚で通っているディラックの城での評判にも関わる。

皮肉なことに彼の愛しい妃であるクリステイナにも恐れられる可能性はあるのだ。

しかし、ディラックは余裕さえ感じさせる笑顔でぬけぬけと言った。

「オーレリア、わたしに何用でしょうか？」

その姿にオーレリアは怒りを抑えきることが出来なかった。

「……っ！ わたくしの侍女を恐ろしい方法で殺害されたのは陛下でございましょう!？」

それに対してディラックはなんでもないことのようにオーレリアを嘲笑った。

「それがなんだというのです」

「な……っ」

てっきり否定の言葉が来るかと予想していたオーレリアはディラックの開き直りとも言える態度に絶句した。

「あの侍女はあなたの命令とはいえ、アイシヤを殺害しようとした。あれは妥当な罰です」

「陛下は成さぬあの娘がそこまで大事だというのですか!」

卑しい血の娘のために、仮にも貴族の血を引く侍女が殺されたのだ。

オーレリアは血走った瞳を見開いて、ディラックを見つめた。

「アイシヤはとても可愛い姫ですよ。あの色合いも珍しいものですし、将来はさぞ美しくなることでしょう。……ただ、我が血を受けていないために彼女の地盤は酷く弱い。それには確固とした王族との婚礼が必要でしょう」

それは、数年後に王太子となるルドガーとの婚姻を暗に示していた。

しかし、そんなことをオーレリアが許すはずなどない。

「まさかルドガーにあの卑しい娘を娶らせるおつもりですか!? わたくしはそんなことは許しません！ 絶対になにがあるかと許しませんわ!」

喉も裂けよとばかりに叫んだオーレリアに、ディラックが煩そうに耳を覆う。

「あなたがいくら反対しても、もう決めたことです。あなたにはもうそんな権力はないのですから」

それは、正妃であるオーレリアの政治的基盤の弱体化を示唆していた。

王に煩わしいと思われているオーレリア、それに対して寵愛を一身に集めているクリステイナ母娘。

果たしてどちらが優勢かは、頭に血の上ったオーレリアにも理解できた。

しかし。

理性では理解できても感情は別物である。

かの母娘が現れてからというものの、苦いものを嚙む思いでいた才ーレリアは再び叫んだ。

「それだけは、許しません。わたくしの目の黒いうちは絶対に許しませんわ！」

「……オーレリア、せっかく正妃という立場に据え置いているというのに、それにふさわしい態度もとれないのですか？ なんなら、その地位から引きずり降ろしてもいいのですよ」

どこまでも非情に言うデイラックに、オーレリアの感情がまた爆発した。

「いったい、どなたのせいなのですか！ とにかく、わたしはあの卑しき者達を許しません！ これ以上はお話しても無駄でしょうから、わたくしはこれで失礼させていただきますわ！」

オーレリアは踵を返すと、足音も荒く王の執務室から退出していった。

ルドガーとあの卑しい娘を娶せるなんてとんでもない。

そんな恐ろしいことになる前にあの母娘には消えてもらわねば。

今までは我慢していたが、確実にあの二人をしとめなければならぬ。どこかで腕のいい暗殺者でも雇わなければ。

そんなオーレリアの感情を知るかのように、デイラックは溜息を付いた。

これは早々にオーレリアの反撃が始まるだろう。

その前にその芽を摘まなければならない。

「アルディアス」

ディラックは今まで姿を消させて待機させていた魔術師の名を呼んだ。

すると、すぐにまだ幼さの残る魔術師が姿を現した。

この魔術師はまだ若いが、トゥルティエール王宮では実力で勝てる者はいない。

「正妃を消せ」

あまりといえばあまりの言葉に、アルディアスと呼ばれた魔術師は絶句した。

「しかし、それではあまりも正妃様がお可哀想では」

正妃への王の仕打ちを知っている魔術師は言葉を濁す。

「これは王命です。このままではオーレリアはクリスティナ達に取り返しが付かないような危害を与えるかも知れません。その前に正妃を消すのです」

そこで、ディラックは一端言葉を切ると、顎に手を当てて考えるようにして言った。

「……そうですね。死因は、王に顧みられなくなった正妃の傷心のあまりの投身自殺というのが一番良さそうですね。アルディアス、首尾良く頼みますよ」

「……かしこまりました」

これ以上、恋に狂ったこの国王に進言しても無駄だと悟った魔術師は、かなり気が進まなかったが王命は王命だ。その罪深さを知りながら、アルディアスは仕方なく了承した。

激昂して王妃の間へ戻る途中のオーレリアは、どの経由でクリステイナ母娘を殺害するか考えていた。

さしあたって、この現状を実家である侯爵家に伝え、協力してもらうのが一番良いような気がした。

ただ、興奮していたオーレリアには、それが露見した時に、実家に多大な迷惑がかかるということは頭になかった。

しかし、クリステイナが現れたことで、王は夜にオーレリアを訪れることはしなくなった。

いくら王太子候補の王子を産んでいるとはいえ、まだ女盛りのオーレリアへの王の処遇を彼女の実家の侯爵家も不満を持っている。

そこへ、どこの馬の骨ともしれない娘を正当な血を引く王太子候補のルドガーが娶せられるのを侯爵家が黙っている訳がなかった。

そこまで考えを巡らせてオーレリアは力を得ると、くすくすと笑いを漏らす。

そんな婚姻は絶対に認めない。あの二人には陛下がわたくしの侍女にしたように陰惨な最期を迎えてもらいましょう。

クリステイナ母娘の惨たらしい最期を想像して溜飲を下げたオーレリアは陰湿な笑みを浮かべた。

すると、そこへ年若い宮廷魔術師がいつの間にか姿を現していた。どうやら、移動魔法でオーレリアの傍に来たらしいが、断りもないそれは、あまりにも不作法と言えた。

「なんです、そなたは。無礼な」

オーレリアは声を荒らげるが、対する魔術師は怒りを露わにする彼女を冷ややかに見ているだけだ。

「誰か……っ」

オーレリアは慌てて周りを見渡すが、傍にいたはずの侍女達がいっつの間にか消えている。

「申し訳ございません。これは王命ですので、あなた様には儂くなつていただきます」

その魔術師の言葉にオーレリアは愕然とする。夫であるはずのデイラックが自分を消そうとしているのか。

確かに、アイシヤを殺せとは命じた。

その代償は実行に移した侍女に被せたはずだ。  
第一、あの卑しい子供はまだ生きていないか。  
しかも、自分の王子と娶せようとまでされている。  
それで、なぜ自分が死なねばならぬのか。

「そんなことは許しません！ あの下賤な母娘も陛下も。正妃をこんな目に遭わせるトゥルティエールなど呪われるがいい！」

その言葉を最期に、オーレリアの体は城の露台バルコニーの近くの空間に放り出された。

その後は加速しながら墜ちていくだけ。

オーレリアは恐怖のあまり絶叫した。

正妃が露台から身を投げたことで、城内は騒然となった。

王宮では、クリステイナに王の寵愛を奪われたのを苦にしての自殺、との見方が大勢を占めた。

美しかった姿は見る影もなく、手足はあり得ない方向に折れ曲がり、脳髓が辺りに飛び散っていた。

その体は舗装された地面に張り付いていて、使用人達が苦勞して引き剥がしてみれば、美貌は惨たらしく潰れていた。

「黙っていれば美しかったものを。こうなっては台無しですね、オーレリア」

そう言って楽しそうに笑うディラックに、王命を受けて仕方なく実行した魔術師のアルディアスはうすら寒いものを感じることを禁じ得なかった。

「……正妃様は最期にこの国を呪う言葉をおっしゃっておりまして」  
それでもディラックは顔色も変えない。更に楽しそうに笑うだけだ。

「そうですね。ですが、死人にはなにも出来ません。……これで、クリステイナ達に憂いはなくなりました。邪魔者もいなくなりました。……これで、これで晴れて彼女を正妃に出来ます」

しかし、第二王妃のクリステイナはそれを堅く辞退した。

真実は知らなかったが、彼女はオーレリアの身投げに心を痛めていた。

それ程までに正妃を追いつめた自分がその後釜として、簡単にその座に付いたのではオーレリアが余りにも浮かばれないと考えたのだ。

『許しません。あの下賤な母娘も陛下も。正妃をこんな目に遭わせるトウルティエールなど呪われるがいい』

その死の間際に呟かれたオーレリアの呪いの言葉。

それを正妃の苦し紛れの言葉と軽く受け取っていたディラックだったが、その内に生死をさまよう病に冒されてしまった。

周囲の者の手厚い看護もあって、どうにか数日で寝台に起きあがれるようになったディラックは、その時になって初めてオーレリアの恨みの深さを思い知った。

そして、彼女が身を投げたとされる露台を中心に、城のあちこちに呪い除けを施したのである。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0649ba/>

---

恋詠花

2012年1月6日00時56分発行